Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-19

日本に現存する刳舟

横山，直材
松木，哲

(Citation)
海事資料館年報,7:13-19

(Issue Date)
1979

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005880

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005880

日本に現存する刳舟

横山直材
松木哲

◦はじめに

美保神社は島根県八束郡美保関に鎮座する式内の古社であって，12月3日に行なわれる諸手船神事は，御祭神事代主神が魚釣りをしておいでの所へ，父神大国主命から国譲りについての使者が熊野諸手船で差向けられたとの日本書紀記載の故事にちなんだ神事として有名である。この神事に使用する二隻の諸手船は，一材からのくり出しではないが，古いくり舟の型を伝える船として古代船舶研究者の関心を引いており，国の重要有形民俗文化財に指定されている。美保神社では諸手船以外にも，中海のソリコ，隠岐のトモド，沖縄のサバニなどのくり舟を蒐集・展示している。

ところでかねてから使用してきた二隻の諸手船は，昭和15年建造以来約40年を経たため新しく建造することとなった。これを機会に，かっては日本各地で使用されていたにもかかわらず，現在ではほぼ姿を消してしまったくり舟について，その現状を把握するため全国的な調査を行なうこととし，昭和53年春に美保神社から調査票を関係方面に発送した。これはその御回答をとりまとめた結果である。

なお新造の諸手舟二隻は文化庁ほか各方面よりの御援助により無事完成し，昭和54年11月18日竣工奉祝祭を行なった。その建造経過は詳細な記録を残すことになっている。

◦調査方法

調査項目は，

1）刳舟あるいは少しでも刳る技法による船が残っていればその名称・場所など
2）刳舟建造の技術を持つ人が現存していればその住所氏名
3）この方面の研究機関あるいは研究者
4）前三項目についてくわしい人があればその氏名

の4項目であって，この中1～3の項目を全国都道府県教育委員会の文化財主管課長および島根県内数箇所の地方自治体へ，1～4の項目を日本海事史学会会員に発送し御協力をお願いした。その結果，

教育委員会関係は54通の発送に対し30通の御回答
海事史学会関係は 348通の発送に対し 125通の御回答

をいただいた。もっとも御回答のすべてに何等かの情報が記されているわけではなく，特に個人からの御回答の約3分の1はくり舟について知見なしとの御回答であった。

◦調査結果

御回答の内容は質問内容にやや明確を欠く点もあって千差万別であり，純粋のくり舟から，くり舟の面影をとどめた程度の舟までを含んでいるが，一応すべてを取り上げた。また日本のくり舟ではない南洋のカヌーをあげた方もあったが，ここでは日本の船のみとし国外から来たカヌーは除外している。くり舟は近年まで実際に使用されていたものがそのまま保存されているほかに，保存展示その他の目的で新たに建造したものもあり，資料としてその区別がつかない場合が多いのでこの両者は一括して整理してある。また御回答の中には考古遺物として発掘されたくり舟を指摘された場合がある。この調査は考古遺物としてのくり舟の調査を目的としたものではなかったが，一応参考のため御回答中の出土くり舟だけを別に集めておいた。なお出土くり舟の中でも，近年まで使用されていたと思われる舟のみは考古遺物には入れていない。くり舟はすでに多数が発掘され，現在でも

時々発見されることがあり，日本で発掘されたくり舟の一覧表を作製することは今回の調査とは別の重要な仕事であろう。

御回答のくり舟は詳細な資料を伴なったものから，旅行中に目撃したもの，さらには知人からの伝聞と精粗に大きな開きがあり，これらをすべて一率に取扱うのには問題があると思われるので，いくつかのグループに分けて整理した。また詳細な資料をすべて記入することは難しいので，折角の資料ではあるが極く簡単なメモ程度に止めざるを得なかった。その代りに御送付いただいたくり舟に関する文献などは別に一覧を付しておいた。

1. 現在も使用されている舟

名　　称	所　在　地	備　　考
まるきぶね	青森県下北郡	磯漁に使用 船底部のみくり，舷側は板を取付けている
くりぶね	秋田県男鹿半島戸賀湾	磯漁に使用（後記の資料参照）
きっつ	秋田県男鹿半島	テングサ採りに使用，短い舟
まるきぶね	石川県鹿島郡中島町瀬嵐（せらし）	オモキの名称は残っているがほとんどくった部分はなくなっている
まるこ	京都府久美浜町	現在ではくった部分は残っていない
まるきぶね	鹿児島県種子島	相当数が残存（後記の資料参照）

2. 保存されている舟

名　　称	所　在　地	隻数	備　　考
アイヌの丸木舟	北海道大学博物館（札幌市）	1	重要有形民俗文化財 函館市立博物館所蔵品と同一人より寄贈
アイヌの丸木舟	北海道立開拓記念館（札幌市）	1	
アイヌの丸木舟	函館市立博物館	2	八雲の酋長シーク寄贈 川でのサケ漁に使用した
泊のまるきぶね	青森県立郷土館（青森市）	1	重要有形民俗文化財
同　上	同　上	2	内1隻は小供用 郷土館では下北郡で使用されている船底部にくり抜きを残す磯舟の新造を依頼中
泊のまるきぶね	泊中学校（青森県上北郡六ヶ所村泊）	1	県重要民俗文化財

名　　称	所　在　地	隻数	備　　考
泊のまるきぶね	稽古館（青森市）	1	泊の丸木舟については「青森県民俗資料図録第２集」（青森県立郷土館発行）に写真がある
大船渡のまるた	大船渡市立博物館（岩手県）	1	重要有形民俗文化財 だんべとも呼ぶ，長さ6.03m，幅80.3cm，一材の丸木舟
同　上	同　上	1	県重要有形民俗文化財 長さ 5.6m，幅84cm，複材（底つぎ）の丸木舟
沢内のまるきぶね	碧祥寺博物館（岩手県和賀郡沢内村）	1	重要有形民俗文化財 杉の一材丸木舟，和賀川の川普請に使用した 上記３隻の丸木舟は「岩手の指定文化財」（岩手県文化財愛護協会昭和50年３月発行）に概要を記載
大沼の箱形くりぶね（きっつ）	秋田経済大学 雪国民俗研究所		重要有形民俗文化財
田沢湖の丸木ぶね	田沢湖町立郷土史料館	1	重要有形民俗文化財
男鹿の丸木ぶね	秋田大学戸賀臨海実習所	1	重要有形民俗文化財 「秋田の漁撈用具調査報告書」（秋田県教委昭和53年３月発行）に男鹿半島の丸木舟の製法聞書，丸木舟の所在調査等がある
くり舟	致道博物館（山形県鶴岡市）	2	
どぶね	上越市立水族博物館	1	重要有形民俗文化財（櫓１櫂４あかとり１共） 「ドブネの製作工程」（新潟県教育委員会昭和33年４月発行）参照
丸木舟	磐舟文華博物館（新潟県村上市）	1	岩船郡朝日村三面で使用されていた
三枚舟	——		同上朝日村で使用されていた 上記２隻については「朝日村文化財報告第

名　　称	所　在　地	隻数	備　　考
			3集」（朝日村教育委員会昭和53年発行）に図あり
くりぶね	亀田町土地改良区（新潟県中蒲原郡亀田町）	1	長さ3.20m 杉の一材
同　上	同　上	1	長さ1.50m 杉の一材 上記2隻については「亀田郷—新潟県文化財調査年報第17」（新潟県教育委員会昭和33年発行）に簡単な記載あり
丸木舟	北方文化博物館分館（新潟県新発田市）	1	加治川で使用していたものが出土
丸木舟	富士博物館（山梨県河口湖町）	1	昭和3年頃西湖から引揚げたものという
丸木舟	藤村記念館（甲府市）	1	伝聞による 本栖湖から引揚げたものとの事
丸木舟	京都府立海洋センター（宮津市） 現在は船の科学館（東京都）で保管	1	舞鶴市倉内家旧蔵 杉一材の丸木舟　長さ 6.8m
江崎のまるきぶね	防府市立海洋民俗資料収蔵庫	1	重要有形民俗文化財
そりこ	島根県立博物館（松江市）	1	
	美保神社	1	重要有形民俗文化財
	海の博物館（鳥羽市）	1	
	神戸商船大学海事資料館	2	
	富津海洋博物館（千葉県）	1	島根県中海で近年まで赤貝漁に使用されていただけに列記したもの以外にも各所で保存されている
	その他		
ともど	焼火神社（島根県隠岐郡西ノ島）	1	重要有形民俗文化財

名　　称	所　在　地	隻数	備　　考
	美保神社	1	県重要有形民俗文化財 隠岐島で使用されていたものを新たに建造した
種子島のくりぶね	西之表市博物館（種子島）	1	現に使用中の船が多数残存している（後記資料参照）
	船の科学館（東京都）	1	東京付近に保存している所が他にもある
奄美大島のスブネ	鹿児島県立博物館	1	
	鹿児島県明治記念百年会館調査室	1	
	岩井記念博物館（徳之島）	1	奄美大島には他にも数隻が保存されている
	鹿児島県立図書館奄美分室	1	鹿児島県下のくり舟については「薩南諸島の刳舟製作習俗聞書」（南島民俗研究会昭和51年６月発行）に詳細な記録がある
	大島高校	1	
沖縄の丸木舟	沖縄県立博物館	1	
	琉球大学	1	
	石垣市立博物館（石垣島）	1	糸満の漁船サバニに関しては「糸満の民俗」（沖縄県教育委員会昭和49年発行）参照
	琉染	1	

3. かって見たことのある丸木舟その他の情報

- 北海道斜里町ウトロの港近くにアイヌの丸木舟が放置してあるのを昭和51年９月に見たことあり。
- 北海道余市の海岸でオモキを持った舟を昭和33年頃見た。
- 船底をムダマと称し刳舟の面影を残した磯舟が北海道で使用されている。
- 福井県小浜地方に丸木舟と名づけた刳舟の形をした漁船が昭和10年代まで使われていた。
- 愛知県渥美半島の太平洋にはボウチョウ船とよばれるくりを一部に残した船が明治末年まで使われていたが，その模型のみ伊良湖自然科学博物館に保存されている。
- 三重県熊野市二木島町室古神社では下半分が楠のくり出し上半分が桧板の船の模型を毎年新造して奉納し（長さ約70cm），１年間神社に納めておく。

4. 出土丸木舟の保存場所

場　　所	備　　考
苫小牧青少年センター（北海道苫小牧市）	道指定文化財 アイヌの丸木舟５隻 苫小牧市出土
八郎潟漁撈用具収蔵庫（秋田県南秋田郡昭和町）	昭和40年八郎潟より出土 長さ17.8m
藤島町（山形県東田川郡）	県有形文化財 昭和７年及び11年発掘 現存部長さ11.5m
——	新潟県北蒲原郡聖篭町次第浜出土　長さ約８m
——	新潟県南蒲原郡栄村字半ノ木遺跡から出土　切断して井戸枠に使用していた 長さ約10mと推定
錦生小学校（三重県名張市）	樟　現存長さ2.82m

場　所	備　考
菰野町（三重県三重郡）	同町出土　長さ 4.5m
芦雪美術館（和歌山県串本町）	杉　約1／4加工
——	丸木舟の一部および舟型木器を展示
	鳥取市桂見より昭和51年出土
	縄文中後期か
三原市歴史民俗資料館（広島県）	三原市内出土の中世の舟
	詳細は三原市史参照
唐比温泉センター（長崎県北高来郡森山町）	同町より昭和49年出土
	現存長さ 4.7m

5.　くり舟の技術を持っている人

氏　名	住　所	備　考
大橋造船所	青森県下北郡風間浦村	県立郷土館から下北の磯舟建造を依頼
渡辺　栄	宮城県本吉郡歌津町港	
大空　栄一	石川県鹿島郡中島町瀬嵐	
沢田慶三郎	同上	
吉岡理一郎	島根県八束郡八束町入江	諸手舟を製作
吉岡　睦男	同上	同上
古藤　勝市	松江市大海崎町	
古藤　清	同上	
渡　吉幸	島根県隠岐郡西ノ島町大字浦郷	
米谷　秋吉	同上	
塚本　岩雄	島根県隠岐郡西ノ島町大字美田	
——	沖縄県糸満市	氏名は不詳だがこれらの各地に居るとの事
——	沖縄県玉城村奥武	
——	沖縄県勝連村津堅	
——	同　浜比嘉	
——	沖縄県平良市池間	

6.　くり舟に関する文献

西村　真次：日本古代船舶研究第一冊熊野諸手船（英文）
（各種の船について第十冊まで続刊）
早稲田大学（第二冊以降は造船協会）
大正6年8月

御薗生翁甫：日本刳船漫考

石塚　尊俊：民俗資料による刳舟の研究—ソリコ・モロタ・トモドを重点として
日本民家集落博物館
昭和35年12月

川崎　晃稔：薩南諸島の刳舟製作習俗聞書
南島民俗研究会
昭和51年6月

秋田県文化財調査報告書第57集：秋田の漁労用具調査報告
秋田県教育委員会
昭和53年3月

新潟県文化財調査報告書第4：民俗資料：ドブネの製作工程
新潟県教育委員会
昭和33年4月

またトカラ列島の中之島での丸木舟製作と追い込み漁の記録がカラー16ミリのフィルム「最後の丸木舟」として日本海事広報協会にあり，貸出しに応じている。

今回の諸手舟建造に際し，建造工程を中心とした16ミリカラーフィルム「樅の刳舟の祭り」が山陰放送によって製作された。

◦おわりに

御回答いただいた内容を整理したものは以上の通りである。何分にも系統的な調査ではなく，しかも実地調査を行なわないで単に御回答いただいた資料を整理したにすぎないから，採録されなかったものも多いと思われる。特に考古発掘丸木舟はここに採録されているのは極く一部にすぎないが，余り一般には知られていないものも含んでいるので，敢えて御回答いただいた分だけを集めておいた。

現在保存されている丸木舟のうち，国あるいは地方自治体が民俗文化財に指定しているものに関しては，教育委員会からの御回答で相当部分が採録されていると思うが，近年まで使用されていたりあるいは現に使用されている舟の保存状況は，正確に把握することが難しい。男鹿のくり舟や中海のソリコなどは実際には相当数が各地に移され，個人所有となっているものも多いようである。中には料亭の装飾に利用されている例もあり，このようなものが将来どう扱われるか気になる所である。また通常の船は古くなれば釘が切れて次第に分解して行くが，丸

木舟は放置しておいても乾いておりさえすれば長期の保存に耐えるから，近年まで使用されていた地方を調査すればまだ相当数が倉庫などに眠っているに違いない。川崎晃稔氏は種子島での所在数を詳細に調査しておられる。

丸木舟は，かっては広く日本各地で使用されていたようである。時代は古くなりすぎるが，室町時代では大部分の舟がくり舟の上に板をつぎ足して大型化していたようであるし，江戸時代でも小型の舟にはくり舟の部分を残しているように見える絵がある。琵琶湖の漁船にはかってはくり舟の部分であったことをしのばせるような模様が画かれている。くり舟の面影を残している舟は気をつけて探せば，このほかにもあるかも知れない。

近世の丸木舟については，石塚尊俊氏の調査結果が〝民俗資料による刳舟の研究〟に記されている。同書と前記川崎氏の薩南諸島の調査を合わせれば，日本における丸木舟の分布を概観することが出来よう。今回の調査では過去にあったくり舟のことを質問していないため，御回答中に出てきた〝かって見たことのある丸木舟〟は偶然記載された少数の例ではあるが，参考のため一応整理しておいた。

くり舟についての参考文献は，調査項目の中には含まれていなかったが，御回答中に記載されていたり，実物あるいはコピーを送っていただいたりしたものの中，単独に出版されている書籍を中心に整理しておいた。この他に雑誌論文あるいは市史町史などの中に含まれた記事を御教示いただいたが，余りに多数になるため省略せざるを得なかった。

丸木舟は現在の使用目的からも分るように，板厚が大きいため少々岩にあたってもこわれないだけの丈夫さを持っているし，しかも重いため風に流されることもすくなく，舟から身をのり出して行なう磯漁には適した舟と言えよう。しかしその反面，一材からくり出した舟はもちろん，数材をつぎ合わせて製作したとしても，相当大きな木材が必要であるし，しかもその木材の大部分をくり出して捨ててしまうことになるのだから，板をつなぎ合わせて作る舟に較べて木材の利用度は低く，無駄の多い舟と言うことになる。もっとも丸木舟は手入れさえよければ意外に長い間使えるから，耐用年数を考えに入れるならば思ったほど悪い舟ではないのかも知れない。

ともかく丸木舟は大きな材が入手しにくくなった事と，木材の価上りとが原因となって急激に姿を消しつつある。日本各地の小型木造漁船でさえ，木材の価上りのため急速にＦＲＰ製に代りつつある現在，今も使われている丸木舟の運命は明らかである。今の中に保存の手を打たなければ，文献に記録を残すだけの丸木舟も少なからず出てくるのではないだろうか。事は丸木舟だけには留らず，現在はまだ多数使われている各地の木造漁船も遠からず丸木舟と同じ運命をたどるのではないかとも思われる。価格の安さと手軽さとを武器にしたＦＲＰ漁船のここ数年来の急激な普及を見ていると，木造船の将来は余り明るくはないようである。

実用品である舟は偶然埋没して残ったもの以外には保存されることもなく，すべて姿を消して今日に至ったが，ある時期日本で使われていた舟を，記録だけでなく，直接手で触れてみられるように実物で残しておく事が必要であろう。このささやかな調査が丸木舟あるいは古い型式を持った舟の保存に多少でもお役に立てば幸いである。

この調査を始めるにあたって御指導をいただいた石塚尊俊先生にお礼を申し上げると共に，御多忙中にもかかわらず御回答をお寄せ下さったり，さらには資料まで御送付下さった教育委員会文化財担当の方々および日本海事史学会会員の方々の御協力に深く感謝申し上げます。